

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730244

研究課題名（和文） 産業革命期イングランドにおける生活水準：貧困と経済犯罪

研究課題名（英文） Living Standards in Industrial Revolution Britain:
Poverty and Economic Crime

研究代表者

山本 千映（YAMAMOTO CHIAKI）

大阪大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：10388415

研究成果の概要（和文）：スタッフォードシャー州文書館所蔵の四季裁判所記録（Calendars of the Prisoners）を、1781年から1851年までの期間について10年ごとに区切ってデータベース化した。窃盗に関する記録から盗品をみると、貨幣に加えて、石炭やパン、家禽などが数多く見られ、下層の人々にとっての生きるための手段としての窃盗という側面が浮かび上がった。同時に、少なくともウォルヴァハンプトンにおいては、盗品の高級化の傾向も見られた。

研究成果の概要（英文）：Calendars of the Prisoners held at the Staffordshire County Record Office have been digitized. The database covers the period from 1781 to 1851. The list of stolen goods derived from the database includes cash as well as coal, bread, and domestic poultry, which indicates that the theft was one important element of their “makeshift” economy. At the same time, we see some gentrification of stolen goods in Wolverhampton, which became a parliamentary borough in 1832 and was incorporated as a municipal borough in 1848.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,900,000	660,000	3,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：数量経済史・生活水準・貧困・犯罪・労働市場

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、18世紀末から19世紀半ばにかけてのイングランドについて、主として農業労働者を観察対象として、彼らの生活水準や彼らが直面した労働市場の性格といった観点から研究を続けてきた。そこで明らかにされたのは、大きく二点ある。すなわち、1) 当時の農業労働者は、賃金労働者といえども、必ずしも賃金収入のみに頼っていたわけではなく、雇用主である農場経営者

から提供されるビールや昼食といった現物支給、慣習的に認められていた収穫後の落ち穂拾いなど、賃金以外の所得が彼らの物的生活に占める割合は少なからぬものであったこと、2) 農業労働者には、年間を通じて雇用される者より臨時的で短期間のみ就業する者の二種類が存在し、雇用量や賃金の決定メカニズムに違いが見られること、である。これらからは、雇用の不安定な者、従って貧困に陥る可能性が比較的高い労働者が多

数存在しており、特に現物支給や落ち穂拾いなどの、市場を介さない食料調達の道が閉ざされた場合、その可能性が高まることが示唆される。

落穂拾いは、従来は労働者の慣習的な権利として認められていたが、18世紀後半から次第に「横領である」という意識が強まってくる。換言すれば、落穂拾いという行為の犯罪化が進展する。加えて、貧困にあえぐ人々にとって、より直接的に窃盗や売春などの犯罪行為に手を染めることは、生活手段の一端であり、経済行為であったと言える。したがって、貧困と犯罪との関係を考察することは、産業革命期の労働者の日常生活をより深く理解するうえで、不可欠であると思われる。

こうした観点から、研究代表者は平成17、18年度に「産業革命期イングランドにおける貧困と犯罪」(科学研究費若手研究(B)(課題番号:17730221))を進めてきた。本研究は、この延長線上にあり、窃盗や詐欺などの経済犯罪を通じて、当時の労働者の生活水準を考察することを目的とする。

2. 研究の目的

州ごとに行われていた四季裁判所(quarter sessions)の記録を用いて、窃盗によって何が盗まれたのかを明らかにすることにより、人々の「その場しのぎの経済economy of makeshift」の一端を明らかにすることを目的とする。

「その場しのぎの経済」は、産業革命期イギリスの生活水準や福祉を考察する際に、不可避の概念になりつつある。従来、生活水準研究の主要な課題は、成人男性労働者の賃金水準の推移であった。これは、彼らの賃金が歴史資料として残りやすいということによるが、歴史学の関心がもっぱら男性の経験のみに偏っていたことにも起因する。しかし、近年の研究では、女性や子どもによる家計への貢献が再認識されており、農場の会計簿など、ミクロなデータを用いた事例研究が積み重ねられてきている。こうした、隠れた労働力(hidden workforce)への関心の高まりは、市場を介した労働力の取引という公的な領域から、心付けや自家生産・自家消費、親族ネットワーク間での資源の融通など、非公式な領域での経済活動への関心も高めて来た。つまり、こうした様々な活動の総体としての生存戦略を考えねばならないことが強調されつつあるのだが、軽微な経済犯罪も、その一環としてとらえられるべきである。

本研究では、各州の治安判事によって年四回開催されたこの四季裁判所の記録を用いて、犯罪という側面から当時の人々の生活水準に迫りたい。

3. 研究の方法

本研究で使用する主な資料は、各州で治安判事によって行われていた四季裁判所の記録である。

当該時期は、刑事訴訟における変革の時期ではあるが、地方レベルでの裁判所は、大まかに言って、判決に死刑を含みうる重犯罪を裁く巡回裁判(Assize)と、州の治安判事によって主宰され、軽犯罪を扱う四季裁判所(quarter sessions)とに大別できる。本研究では、ミッドランド北部のスタッフォードシャーにおける州裁判所記録を用いて分析を行った。

スタッフォードシャーは、州の北部と南部に炭鉱を持ち、産業革命期には、ストークオン trent を中心とする北部の陶器製造業地帯(the potteries)とウォルヴァハンプトンを中心とする南部の製鉄業・鉄加工業地域(black country)が全国的にも重要な地位を占めた。加えて、州都スタッフォードの位置する中部は混合農業地帯であり、その農業と製造業のバランスから、産業革命期には、「イングランドの縮図」と呼ばれた。このため、ここでの動向を探ることは、当該時期の英国全体の動向を探るためのパイロットスタディーとして、重要なものとなる。

スタッフォードシャーの四季裁判所では、各期(Easter Session(4月)、Translation Session(7月)、Michaelmas Session(10月)、Epiphany Session(1月))の裁判が終わると、A Calendar of Prisoners という資料が作られ、その期にどのような人が裁かれ、どのような刑が下されたかが記録されている。この史料は、スタッフォードシャー公文書館に、1777年から1860年の10月期のもので残されている。この記録をデジタル化し、各犯罪者を犯罪種類別に分類した後に、窃盗犯について、誰からどのようなものを盗んだのかという点について整理する。また、1841年以降のセンサス個票(個人の住所・氏名・年齢・性別・世帯主との続柄・職業等が判明する)を適宜用いて、それぞれの犯罪者や被害者の属性についても可能な限り復元する。加えて、同データベースで整理した被害者の出自について明らかにするため、18世紀末から刊行されている商工人名録もデジタル化している。具体的には、1780年、1793-8年、1818年、1851年の四つの商工人名録を用い、ウォルヴァハンプトンに範囲を絞って、被害者の出自を可能な限り、明らかにした。ちなみに、ウォルヴァハンプトンは、19世紀中期においてはスタッフォードシャー最大の都市であり、英国全体でも第9位にランクされている。

4. 研究成果

前述した商工人名録からは、ウォルヴァハンプトンにおける経済構造の変化の一端を垣間見ることができる。商工人名録を時系列的に用いることは、記載される人々の範囲が時代ごとに異なるため注意が必要である。この点に関しては、英国における人口史、社会構造史の中心地である、the Cambridge Group for the History of Population and Social Structure が開発した PST システムと呼ばれる職業分類法を用い、比較的大まかな括り（第一次産業、第二次産業、第三次産業）で職業構造の変化を確認した（下の表参照）。

1780		
第一次産業	6	(0.9%)
第二次産業	497	(78.9%)
第三次産業・計	126	(20.0%)
第三次産業(卸売+小売)	97	(15.3%)
第三次産業(卸売)	28	(4.4%)
第三次産業(小売)	69	(10.9%)
第三次産業(サービス+専門職)	27	(4.2%)
第三次産業(輸送+通信)	3	(0.5%)
合計	629	(100.0%)
人口	10,134	
人口カヴァレッジ	6.2%	
1793-8		
第一次産業	10	(1.4%)
第二次産業	456	(62.4%)
第三次産業・計	263	(36.0%)
第三次産業(卸売+小売)	120	(16.3%)
第三次産業(卸売)	24	(3.3%)
第三次産業(小売)	96	(13.1%)
第三次産業(サービス+専門職)	141	(19.2%)
第三次産業(輸送+通信)	3	(0.4%)
合計	731	(100.0%)
人口	11,879	
人口カヴァレッジ	6.2%	
1818		
第一次産業	6	(0.5%)
第二次産業	808	(70.8%)
第三次産業・計	327	(28.7%)
第三次産業(卸売+小売)	155	(13.6%)
第三次産業(卸売)	80	(7.0%)
第三次産業(小売)	76	(6.6%)
第三次産業(サービス+専門職)	172	(15.1%)
第三次産業(輸送+通信)	0	(0.0%)
合計	1,140	(100.0%)
人口	17,236	
人口カヴァレッジ	6.6%	
1851		
第一次産業	37	(1.6%)
第二次産業	1088	(47.5%)
第三次産業・計	1165	(50.9%)
第三次産業(卸売+小売)	601	(26.2%)
第三次産業(卸売)	263	(11.5%)
第三次産業(小売)	338	(14.7%)
第三次産業(サービス+専門職)	555	(24.2%)
第三次産業(輸送+通信)	10	(0.4%)
合計	2,290	(100.0%)
人口	49,985	
人口カヴァレッジ	4.6%	

複数の職業を兼ねている者については、当該の職業に 0.5 (二つの職業を兼業の場合) 0.33

(3つの職業を兼業の場合)を加えた。このため、表中の四捨五入した値の合計値が異なる場合がある。

もっとも顕著な職業構造上の変化は、第二次産業の相対的縮小と、第三次産業の拡大である。ウォルヴァハンプトンは中世に起源を持つ市場町なため、農業部門は一貫して小さいが、18世紀中から19世紀初頭にかけては、伝統的な錠前生産を中心とする機械製造業がかなりの比率を占める。他方で、1832年の選挙法改正によってバラ選挙区となり、1835年の都市自治体法に基づき、1848年には法人化されるといった一連の都市としての発展に従って、1851年においては、第三次産業、特にサービスや専門職が非常に大きな比率を占めるようになる。このことは、civic prideの高まりを予想させ、盗品の高級化が伴うことを期待させる。

四季裁判所データベースによる窃盗についての分析からは、特に初期においては、盗品として、貨幣に加えて、石炭やパン、家禽などが数多く見られ、下層の人々にとっての生きるための手段としての窃盗という側面が浮かび上がった。他方で、少なくともウォルヴァハンプトンにおいては、盗品の高級化の傾向も見られる。シルク製品や時計、銀器といったものの出現頻度は、時代を追って高まる傾向にあり、都市のミドルクラスの生活水準の上昇を示唆していると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

Chiaki YAMAMOTO, Men's unemployment and job opportunities for women, Economic History Society (UK), 2010.3.27, University of Durham.

Chiaki YAMAMOTO, Men's unemployment and job opportunities for women, the Cambridge Group Seminar, the Cambridge Group for the History of Population and Social Structure, 2010.2.15, University of Cambridge.

山本千映, 「女性の生存戦略: Calendar of the Prisoners, Staffordshire」, 駿河台大学公開研究会: 歴史における人口と経済, 2009.3.14, 駿河台大学

山本千映, 「19世紀イングランドにおける農業、失業、救済」, イギリス都市農村共同体研究会, 2008.5.9, 早稲田大学

〔図書〕(計3件)

中野忠他編(山本千映) 刀水書房、『18世紀イギリスの「都市ルネサンス」—都市空間の再構築—(仮題・発行確定)』(2011) 280-90ページ(予定)。

奥西孝司・堀田隆・鳩澤歩・山本千映、有斐閣、『有斐閣アルマ 西洋経済史』(2010) 334ページ(うち83ページ執筆)。

安元稔編(山本千映) 日本経済評論社、『近代統計制度の国際比較—ヨーロッパとアジアにおける社会統計の成立と展開—』(第4章「ヴィクトリアン・センサス—1841年センサスの成立—」)(2007) pp. 141-177。

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 千映 (YAMAMOTO CHIAKI)
大阪大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号：10388415